

---

# 黎明の騎士団

ゼータ 如月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黎明の騎士団

### 【Nコード】

N0212Y

### 【作者名】

ゼータ 如月

### 【あらすじ】

かつて、神々は人々にまだ生きる価値の生物であるかの審判を下すため、戦争を引き起こしたことがあった。これを「神伝」と呼ばれる3つの伝記に記されていた。その伝説の中で生きる武器「ソウルブリンガー」は世界のどこかで不気味な光を放ってその使い手を待っていた……。

この物語はとある傭兵騎士団の騎士マルスの物語である。

## 天の章 1節（前書き）

はじめまして、ゼータ如月と申します。

文章を作る・・・ということがとても苦手なので、何かの勉強になればと思いきり不器用ながらも書いた作品です。

つたない文章ですが、何かあれば感想などいただけたら嬉しいです。  
この物語はファンタジーで作られた世界です。

## 天の章 1節

思えば、すべてはこの剣が始まりだった。

炎を司る神、サラマンダの如く戦果を上げることから傭兵騎士団サラマンダーの名を襲名された俺たちはあの日も数々の戦果を挙げ、国から多額の報酬を得ていた。

俺たちは最強だ、この国に俺たちの右に出るものはいないとまで言われるようにまでなっていた。

魔物退治、戦争、護衛・・・どれも決して綺麗な仕事じゃなかった。もちろん人に恨まれ、逆恨みで襲われたこともある。

しかし、それでも心のどこかで俺はこの仕事に充実感を得ていた。

・・・だがそう思っていた時間は瞬く間に消え去っていった。

傭兵は協会で管理されている団体で、直接的な決定権は団体を管理する国が持っている決まりになっている。

俺達はあの日、王の使いと名乗る女からの依頼で北の山にいるドラゴンを倒してほしいという依頼を受け、山へと向かった。

傭兵団の規模は6人と決して大規模というわけではなかったが、今回竜殺しの依頼、俺達にとってその程度のモンスターなら国の兵士を借りずとも倒せる、そう思っていた。

騎士団長のアヴェンと副団長のオーウェンもそう判断し、俺達傭兵団のみで山へと向かった。

その山は古くから神殺しの剣「ソウルブリンガー」と呼ばれる剣が安置されている。

そのため、この山の名前は魂の山と呼ばれ、普段魔物が強力すぎるためか誰も近づかない聖地になっていた。

俺達はもちろんそんな魔物に苦戦することもなく、山の頂上へとたどり着いた。

「・・・みんな、ここに居るのはこの国で最強の魔物と呼ばれるインペリアルドラゴンだ。」

「ああ、わかつている。ゴッツ、レヴィン、アルファ、マルス、みんないけるな？」

「おう！行こう団長！」

この時、俺達は知らなかった。この山に潜んでいたのはインペリアルドラゴンではなかったということに。

- - - - -

はあ・・・はあ・・・体が重い、燃え尽きる、熱い・・・。

俺は焦がされた左肩を抑えながら山を下る。

行きしなになぎ倒した魔物が今となっては忌まわしく思うほど強い。血が滴りながら、必至に山を下る。

すべては仕組まれていた、あの女は国の使いじゃない・・・。

一体何者なんだ・・・。

「・・・そうか、あいつは・・・！し、しかし！」

力を振り絞り、山で手に入れた剣を振り回しながら先へと、先へと進む。

かすかに見える村の明かり、俺はさすがのようにその村へと飛び込んだ。

・・・助かった、だが他のみんなはどうなってしまったのか。

「団長、ゴッツ、レヴィン、アルファ・・・みんな・・・。」

数時間前、俺達が山で見たのは竜ではなく、一本の剣であった。

インペリアルドラゴンと呼ばれる竜がいるという伝説は真つ赤な嘘だったのだ。

だが、その山へとたどり着いた瞬間、副団長の様子がおかしかった。

「・・・これが伝説のソウルブリンガーか・・・悪くない。」

「オーウェン、何をやっている？それよりドラゴンなんていないじゃないか。」

みんながざわめきながらあたりを見渡す。

ぎらぎらと輝くものが洞窟の天井でちらついていた。

これは水晶石と呼ばれる鉱石だ。

この薄暗い空洞がこの石によって神秘的に思わせるほどの美しさを放っていた。

「き、綺麗だ・・・。」

「・・・しかし依頼はどうする？竜の首が証明として持ち帰れというのが条件だったな。」

「団長、その心配には及びません。何故なら・・・！」

副団長はソウルブリンガーで団長を切り裂いた。

鎧は裂け、血があふれていた。致命傷だ、この上ない一撃が団長を襲った。

その光景にあっけにとられていたアルファも瞬く間に殺された。

俺とレヴィンは無言で剣を抜き、ゴツツは無言で副団長にタックルを仕掛けて態勢を崩させた。

「うおおおおおお！」

雄たけびと共に副団長を俺は切り倒した。何かもたえるように手を伸ばしながら息絶えたのを俺達は確認した。

それ違いの刹那、俺とレヴィンはたった一度の振りで傷を負った。  
レヴィンは致命傷だ。

「レヴィン！しっかりしろ！」

「な、なんてことだ・・・ゴッツ、マルス、お前たちだけでも逃げ  
るんだ・・・。」

そう呟くと、糸が切れたかのよう返事をしなくなった。

現実ー引き戻されたゴッツは怒号を上げ、俺も立ち上がって洞窟か  
ら飛び出した。

その時、無意識かソウルブリンガーを片手に持っていた。  
俺達は無我夢中に走った。

.....

意識が戻ると、そこには暖かい天井が目に焼きついた。

暖色系の、暖かい部屋、暖かいベッド・・・。

ここは天国なのか？そう思った刹那、再び現実へと引き戻されるよ  
うに起き上がった。

「・・・ここは？」

「目が覚めたかマルス。俺の家だ、安心しろ。」

隣には包帯で包まれた男がどしんと構えて座っていた。  
声でわかる、ゴッツである。

「ゴッツ・・・生きていたのか！」

「ああ、なんとかな。谷から落ちたときは俺も無理だと思ったが、  
運よく生き延びたよ。」

ただ、見ての通りだがな。」

「・・・俺達はどうかやら騙されたようだな。」

「それなんだが・・・お前が寝ている間にいろいろ調べたんだがどうやらそうでもないみたいだ。」

ゴッツは意味深な発言をした。

この時、俺にはこの言葉の意味がまったく理解できなかった。

奴は剣と大きな荷物を手にとると、俺にこの国から立ち去るぞと言葉をかけた。

今回の事件の真相は国を去ってからゴッツから聞かされた。

あの女の正体は国の裏で暗躍する教会と呼ばれる団体の使い。

奴らはどうかやらこの剣の存在を本当に幻のものにするために今回の依頼をしたということだ。

裏切り者のオーウェンは教会の暗部の一人で、俺がそれを知ったのはゴッツから聞かされてからである。

・・・俺たちが襲われたのは口止めが理由である。

「・・・ということは、俺たちが生きていることが知られたら。」

「間違いなく、殺されるだろう。」

ゴッツはそう言いながら酒を口へと運ぶ。

「これから、どうするんだ？」

「どこかで平和に暮らすか、どこかで傭兵をするか・・・後者だとまた命を奪われかねないけどな。」

笑いながらそうゴッツは言った。

この男ほど、俺の神経は凶太いわけではなかった。だが、どこか救われた、そんな気がした。

「なあゴッツ、団長達の仇をとらないか？」

俺は思わずそう呟いてしまった。

だが、ゴッツの顔は満ち足りたような笑顔で俺を見ていた。

「そうだな、逃亡生活になる前に奴らを倒しに行ってもいいかもし  
れん。」

なら、俺達の目的は仲間集めといったところか？」

「ああ、そうだな。じゃあ、まず魔術の国と呼ばれるアースへ行こ  
う。」

「魔術を扱うものか・・・いいな。よし、いくぞマルス！」

「ああ！」

## 天の章 2節

学問の街ウィズダム。

ここは世界で最も大きな国立図書館のある街だ。  
学問に関してはまったく無知の俺にとって、頭の痛くなる街だ。

「ゴッツ、俺達がそんなところへ行っても仕方ないんじゃないの？」

「・・・いや、気になることがいくつかあるんでな。あと古い友人のもとへ行きたい。」

ゴッツがそういいながら、街の奥へと進んでいく。

しばらくすると、薄暗く、古びた建物が多く並んでいる区域へとたどり着いた。

ここはスラム街で、貧富の差があまり問われないこの国では珍しい光景がそこにはあった。

「こんな平和的な国にでもこんな場所があるんだな。」

「基本ここでは裏に手を回して処分を下された人間が集まる場所だ。そんな人間に仕事を与えることを生き甲斐としている奴がいてな。」

案内された場所は”黒魔術研究所”と書かれた看板の建物である。

一見酒場のような見た目をした古びた建物だが、看板にはそう書かれている。

こんな場所では、まともな建物はないのだろう、俺はそう思いながら中へと入った。

「ゴッツか、久しぶり。」

「生きていたか、裏社会の住人にしか頼めない仕事があつてな。」

ゴッツは席につくと、すぐさま大金を机の上へとたたきつけた。フードを被った、恐らく女だろう。その金を手に握り締めながらフードから頭を出した。

「・・・その様子だと、何かあったみたいだね。」

「ああ、ちよつと厄介なことに巻き込まれてな。」

「ふーん・・・、私の知ってる情報だとあんた達は死んだことになっているんだけどね。」

インペリアルドラゴンに葬られた・・・と。」

「やはりか。」

俺は啞然とした。国は既にそういう発表を行っていた。

今の俺達はいわば生きる屍、もうこの世に存在していない人間であることになっていた。

殺したのは・・・存在していないインペリアルドラゴンという設定だ。

船でこの大陸へ向かっている時にゴッツから全てのからくりについて話されていた。

教会は剣の存在を消すため、俺達に仕事を依頼したということはさすがの俺にでも理解できていた。

だが、それは教会の人間にもできることだ。

しかし、それでも奴らは俺達に依頼しなければならない事情があった。

それが俺達の存在だ。

国と俺達の信頼というのはそう簡単に崩れないことは教会も承知していた。

そのため、たとえ剣を消したとしても俺達の存在自体がまず邪魔だったということらしい。

思えば副団長オーウエンははじめからそのつもりで潜り込まされて

いた可能性があった。

「えげつないな……、くそっ！」

「そういきり立つな、でどうだ？できそうか？」

「はん、まかせな。……というより、今すぐにでもできるよ。」

女はそういういながら、カウンターの下から何かを取り出した。

分厚い書物、地図、見たこともない鉱石。

次々と何かを取り出ししていた。

「こいつが旧神伝だ、そしてその坊やの後ろにある剣がソウルブリンガーかい。」

「あ、ああ……。」

「ふーん……、大事にとつときな。いずれどういものかわかるさ。」

それとゴツツ、あなたは敵討ちと言っておきながら別のことをやろうとしているのはなんですか？」

「……それ以上に気がかりなことがあってな。それをまず調べたい。」

真実にたどり着いてから、敵討ちをするかを考える。」

「えっ？」

俺は耳を疑った。

たしかに敵討ちを提案したのは俺だ、だがゴツツは目的が違っていた。

「どづいつことなんだ……？」

「お前には言っでなかったが、俺はあの時山へ降りれないと悟ってあの剣のあった洞窟へ行ってたんだ。」

そこでまだわずかに息のあった団長から遺言を言い渡されていた。

何か裏がある、それを調べろ・・・と。」

「そんなことが・・・ゴッツ、お前一体どうやって山を降りたんだ？それだと・・・。」

「そいつは今となってはどうでもいい、それでまずやるべきことがあるんだ。」

仲間集めもそうだが、最初にこの旧神伝に記された謎から解き明かす。」

本を開き、まるでわかっているかのようにぺらりとページをめくり始める。

「驚いたたる坊や、この悪ガキゴッツは傭兵という力仕事をしているが、元々この国の出身なんだよ。」

だから、頭もいい。」

「そうだったのか・・・。」

「そんなことはどうでもいい、さて・・・と。もうひとつの依頼の方はどうだ？」

「連絡はつけといたよ、東北の村で合流するといい。」

「もうひとつの依頼？」

俺一人話からおいてかれていた。

後で聞くと、ゴッツは俺がアースを目指そうといった時にこの計画を考えていたらしい。

仲間探しのついでに、教会のことを調べることに。

この後街を出て、歩きながら新しくわかったことについて聞かされた。

教会の目的、ソウルプリンガーとは何か・・・。

-----

教会の目的は世界の混沌。

ありふれた世界征服みたいなものか、と俺は最初に考えていた。だが実際は違うらしく、そもそも教会という団体は遙か大昔から存在していることも聞かされた。

彼らはそもそも神を信仰する団体で、主に死に逝く人々に祈りを捧げ、この教会を主として活動していた。

だが、この教会を作ったのは神伝によれば”神”であることが記されていた。

この神伝がもし現実にあつた話である場合、教会の実体は大きく変わってくる。

そもそも教会が作られた理由はテンプルナイトと呼ばれる騎士が魔女狩りを行うためであつた。

魔女狩りを行われた理由については今回の神伝の海の章では不明だったが、教会という団体は元々何かしらの理由でそういったことをやっていることには変わらない。

「しかし、今回その話がどう関係しているんだ？」

「ああ、オーウェンが持っていた聖書がここにあるんだ。」

ゴッツはそう言うと、バッグから聖書を取り出した。

そこには教会の理念について書かれていたらしく、神伝についても触れられていた。

「こいつによれば、今教会がしていることは何かのために世界の混沌を目指しているみたいなんだ。」

ただこの聖書からはその目的までは見えなかった。」

「・・・俺にはさっぱりだ。」

「ただ、ソウルプリンガーを回収するためにあのようなことをした

ことを考えれば、俺の推測はあっているはずだ。」

そう言いながら、ゴッツは聖書をしまった。

もうひとつ、ソウルプリンガーとは一体なんなのか。

神伝にも実は肝心な部分がかかれていなかった。

神伝とは、3部構成になった書物である。

さっきまでの話は海の章の大部分を占めていた協会という団体についての話。

そしてもうひとつが神々と人々の戦いの結末。

だが、神との戦いで切り札とされたのはソウルプリンガーと言つことだけは書かれていた。

「つまり、神を倒すための武器だつてことか？」

「ああ、恐らくな。そして謎と言つのはその武器の正体だ。」

さて、村で仲間と合流したら残り2冊を探すぞ。あの街には海の章しか存在していないからな。

どこかで必ず旧神伝の天の章、そして地の章があるはずなんだ。」

「俺達の国には三冊ともあつた気がするが。」

「新じゃあだめなんだ、あれにはインペリアルドラゴンなどにも触れられている。」

協会が捏造した書物である可能性が高い、だから使えん。」

そついいながら、がしがしと足を進めていった。

話しながら歩いていくと、気づけば村へついていた。

ふと見ると、そこには一人の男が立っていた。

「あんたが俺達の仲間になつてくれる魔術師か。」

「ああ、俺はサファイア。ジュエルカルテットと呼ばれる魔術師団の末弟だ。」

「助かるぜ、けど事情は聞いて仲間になつてくれるのか？」

俺は半信半疑で問いかけた。

サファイアは頷くと、こっちへと歩みかけてきた。

「よろしく頼むぜお二人さん、俺はマミイからはあんたたちの目的が成就されるまでは帰ってくるなっていわれてるからな。」

「ありがたい話だ。」

ゴッツはサファイアと強く握手した。

そのまま、俺達は宿屋へと向かった。

.....

翌朝、俺達は朝一で村から旅立った。

まずはじめに片っ端から図書館の存在している街を回る事となった。

数週間と見て回ったが、めぼしい書物は一切見つかることはなかった。

「ふう・・・旧神伝ってそんなに見つからないものなのか。」

俺はそっぴいなながら、ベッドへ腰掛けた。

ゴッツとサファイアはさっぱりといった顔で酒を口の中へ運んだ。

「ここまで来ると、普通の図書館とかにはないのかもしれないな。」

「ああ、まったくだ。あの人が書物持っていたのが不思議なくらいだ。」

「うーむ・・・、そもそも海の章だけでも何かわかることはないのか？」

俺は唐突にそんな言葉を二人に投げかけた。  
ゴツツは何かを思い出したかのように、海の章を取り出してページをめくり始める。

「そういえばそうだ、この書物の情報でもできることがある。まず、こいつを見てくれ。」

羽ペンを取り出し、本に何かをメモし始めた。いくつか数字と文字を並べ、線を引き始める。そしていくつかの地名にペけ印でマークする。俺にはこれが何を示しているかさっぱりわからなかった。俺だけじゃない、横で見えていたサファイアも首をかしげていた。

「今から説明する、この書物に出てくる地名に今すべて印をつけた。」  
ゴツツが言うには、書物に書かれた地名は必ず何かがあるから記されている、とのことらしい。

その話には信憑性は高い、何故なら村や城の地名については村としか、城としか書かれていない。  
だが、特定の遺跡や神殿にはしっかりと名称が書かれていた。

” 竜の滝 ”

” 虚空の塔 ”

” アース神殿 ”

” トライアングル海峡 ”

「なるほど、ここから一番近いのはアース神殿か。」  
「そうだな、ならそこへ向かうか。」



### 天の章 3節

アース神殿、アース国で古代から存在している建築物。

今となつては国家遺産にも認定されており、観光者に愛された土地だ。

しかし、神殿最深部は未だ魔物が強力すぎるためか誰も踏み入れたことがないことでも知られていた。

俺達はそのアース神殿の奥へと足を踏み入れていった。

世間的に観光地と知られている部屋は古びた神殿と思わせるような小汚さはまったく感じなかった。

むしろ、まめに手入れをしている印象が強く、俺にはこの建物のごがいいのか、さっぱりわからなかった。

だが、實際億のフロアへと進むにつれて、大昔の建物であるような古びた姿がその輪郭を見せ始めていた。

「ここらへんから汚いな、しかも薄暗い。」

「そりゃそうだ、ここから先は管理している団体ですら踏み入れたことのない部屋ばかりだからな。」

しかし・・・ここは聖なる神殿にも関わらずゾンビが多いな。」

サファイアは炎の球を掌でゆらゆらと揺らしながらぼやいた。

彼のおかげで足もとがよく見える。

「ゴツツ、ふと疑問に思ったんだが俺が知っているアース神殿は太陽の神を祀る建物のはずだ。」

だが実際見てみるよ、この建物に描かれている壁画はどう見ても太陽の神を祀るようなものじゃないぜ。」

「・・・たしかにな、旧神伝には太陽については触れられていたから、俺もてつきり太陽の神を祀る建物だと思っていた。」

蜘蛛の巣を切り払いながらゴッツがそう呟く。

サファイアは壁画についてはまったく触れることはない、どちらかというと興味がないように思えた。

だから俺は一度剣を鞘にしまい、サファイアの足を止めて訊ねた。

「お前は どう思うんだ？ さっきから壁画にまったく無関心みたいだが。」

「俺はどつちかというところが多いことの方に引かかっている。ゾンビって早い話、死者だろ？ なら、このゾンビは一体元々何をしていた人間だ？」

言われてから俺とゴッツも疑問に思った。 たしかにここにいる魔物はみなゾンビだ。

だが、ゾンビはかつて人間だった。 それならば、この神殿の奥深くに足を踏み入れたことがないというのは矛盾していた。

何故なら、ゾンビは俺達傭兵にとってはただの雑魚にしかすぎない。

「しかも、ついでに言えばこのゾンビはあんたら二人がいるからこそ倒せている。」

ゾンビにしちゃ、強すぎる。俺は壁画よりそっちの方が断然不思議だ。」

このゾンビが纏っている衣装はほとんどぼろぼろで、何かは見分けがつかない。

倒したゾンビの衣服に触れると、腐っているのかこなごなに砕ける。しかし、あたりに散乱しているものは鉄で作られた何かが多い。

「しかし・・・行く部屋見ると、何かの儀式をしていた。あるいは寝床のどちらかしかない。」

「この最深部には一体何があるんだ……。」

「どうやら、最深部のようだ。見てみる、かなり広い部屋に出たぞ。」

まるで聖堂のような印象がある。

この大きな部屋の左右には椅子が配置されていて、協会と似た間取りをしていた。

中央には祭壇、一人人が横たわれるスペースがある。

その祭壇の上には骨が、そしてその胸には剣が刺さっていた痕跡が残っていた。

「……何かしらの儀式をしていたと見るのが妥当か？」

「だろうか、しかしこの剣の痕……やけに細いな。」

「この形状だと、エクセキューションアーツソードだろうな。」

エクセキューションアーツソード、早い話が処刑をするための剣である。

正確に人を殺すために刃はレイピアのように細い形状だ。さらに斬撃能力はなく、突きだけの能力に特化した剣だ。

「この骨格、女だな。」

「……もしか、このアース神殿は協会の施設か？」

「どういうことだマルス？」

「海の章では、教会のテンプルナイトが魔女狩りを決行したって話があっただろ？」

「ここで行われていたんじゃないのか？」

俺が今いった言葉はこの部屋がすべて物語っていた。

アース神殿が太陽の神を祀る神殿であるというのは表向きの顔。

実際は魔女狩りのため、誘拐した女をここで始末していた。

目的自体はここに来てわからなかったが、これで一つ目の謎が解き明かされた。

「つまり、あのゾンビは全てテンプルナイトか……。」

「いや、それはおかしい。それならば、あのゾンビは何かしらの武器を持っていてもおかしくはない。」

どちらかというと、司祭という印象の方が強かった。

それに、テンプルナイトがここで死んだ理由がわからないことになる。」

サファイアはそう疑問を投げかけると、祭壇へと足を運ぶ。

可愛そうに、そんな言葉を呟くと、ハッと何かに気づいたかのように後ろを振り向いた。

「二人とも、用心しろ！何か来るぞ！」

その掛け声と同時に俺達も剣を抜く。

緊張が走る、今までざわついていた胸騒ぎがぴたりと収まる。鼓動も何も聞こえない。

さっきまでかすかに聞こえていたゾンビの足音ですら響かない。何かがある、俺もそう感じた。

「……違っ！」

ゴッツがそう言うと、サファイアと俺はすぐに脇にある椅子へと飛び乗った。

地中から無数の手が飛び出した。ゴッツはこれにいち早く察知したのか祭壇の上へと飛び移っていた。

「こ、これがこの神殿の最深部へと踏み入れた人間がない理由か

「！」

「ああ、おそろくな。この部屋の下には一体何があるというのだ・  
・。」

「……まかせろ。」

サファイアは両手を地面にかざし、紋章を地面へと刻む。

その瞬間、中央の床がぼろぼろと崩れ落ちた。下には大きな空洞が広がっていた。

俺達は目を疑った、そこには巨大なきみの悪い生き物がうようよと蠢いていた。

「ひ、ひとつめの化け物か……！」

「どうやら死体を操っていたのはこいつのようだな。はじめて見たぜ、こんな生き物は。」

「どうする？もう目的は成就された。こいつを倒す必要はない、引くのも手だぜ？」

「……いや、俺達はもしかしたらやってはいけないことをしたのかもしれないな。」

ゴッツは神殿の両壁に貼られた封印に指さした。

この生き物はここに安置されていたのではない、封印されていると指摘した。

「なら……倒さねばならないな！」

「ゴッツ、俺がソウルプリンガーで一撃でしとめて見せる。まわりのゾンビの排除を頼む！」

俺は剣を抜くと、下の階へと飛び降りた。

その着地の刹那、頭上から火の玉が降り注いだ。

サファイアの魔術だ、あの一つ目の魔物のところまでの道ができて

いた。

俺は一気にかけて走り、魔物のもとへと向かう。

途中襲い掛かるゾンビに飛びつき、頭を土台に飛び込んだ。

その真横から他のゾンビが襲い掛かる、がゴツツが上から飛び降り、なぎ払う。

「いまだ！」

その掛け声と同時に一閃、奴の瞳に刃を入れた。

そうすると、一つ目の化け物は苦痛を味わうように暴れ始めた。

俺はそのままその一つ目の魔物の上へと飛び移ると、もうひとつ持っていたショートソードを頭上へ深々と刺す。

さらにもだえる、俺はその瞬間に飛び降り、ゴツツと共に下がる。

まわりにいたゾンビは糸が切れたかのように倒れこんだ。

「二人とも！さっさと上へあがれ！床が緩んでいる、崩れるぞ！」

俺達はサファイアが上からたらししたロープへつかまり、急いで上へと登る。

上から見ていたが、魔物はもだえるように暴れ、その影響で床が崩れ落ちた。

さらに下にも部屋があったみたいだが、その魔物が暴れたことによつて天井が崩れ、埋もれてしまった。

「・・・ちっ、仕方ないか・・・」

しかしあいつは一体なんだったんだ？」

「わからん、しかしこの神殿の謎は深まるばかりだ。

わかったことはテンプルナイト達の活動拠点だったとしか言えないからな。」

「いや、それだけでも十分でかいがな。よく考えてみる、ここが教

会と深い関わりのある建物であるのはわかった。

ということとは、他の場所も同様である可能性が高い。」

「なるほどな。」

ゴッツの言葉に俺は深く頷いた。

サファイアもそうだなと一言、火の玉を再び掌に出し、来た道を戻り始めた。

俺達もその後が続く、当然目的がはっきりとしたからだ。

次の目的地はここから近いのはトライアングル海峡だ。

- - - - -

一ヶ月の時間が流れた。

俺達はトライアングル海峡と竜の滝と二つの場所をまわったが、有益な情報は何一つ得ることができなかった。

トライアングル海峡についてはまず、船で向かったものの何も見つけることができなかった。

それどころか、たしかに特別な何かがあったら違うに違いないが、そこには何もなく、海底にも何もなかったことが地元漁師から聞いて判明したというぐらいだ。

竜の滝も同様だ、こちらは滝の裏に洞窟はあったものの、その先には何もなかった。それどころか、教会に関わるものすら見つからず、それ以外にもあったのはただの錆びた剣が一本あった程度である。念のため、それが何かを調べるために持ち帰りはした。だが、その剣はどこにでもある、ただのロングソードであることがわかったぐらいだ。残されたのは、虚空の塔のみだ。

アース国から遠く離れた砂漠の大地ドラグーンに塔はあることがわかってはいるが、こちらは正確な場所が不明とされており、未だに足取りがつかないままになっていた。

「・・・虚空の塔は情報が皆無だ。」

「ああ、どこにも見つからない。気球からでも塔の存在が確認されていないのはさすがに不思議だな。」

二人はいらいらした様子を見せながら書物にがつついている。

いくつか古代の地図から、最新の地図までもアース国の図書館から持ち出し、使っていた。

俺も同様にいくつかの地図と情報収集を試みたが、なにひとつ有益な情報は得られなかった。

「旧神伝にはこの地にあることが記されていて、新神伝には俺達の大陸ガイアにあることが書かれていた。」

ガイアには実際塔はあるが、あれは虚空の塔ではなく天の塔であることが一般的だ。」

「そして、その天の塔はただの観光名所、そして歴史の浅いことでも知られている。」

だからその塔が虚空の塔であるはずがないんだ。」

俺達はただ溜め息をつくことしかできなかった。

それもそのはず、俺達は虚空の塔のほかにも見つからないものがあるからだ。

旧神伝の天の章と地の章、これも見つからないため、何の手がかりもない。

まさに八方塞だ。

「・・・明日宿を発とう、次は念のために砂漠地帯にも足を踏み入れよう。」

もうそこにあるとしか思えない。」

「そうだな。」

サファイアは息抜きに部屋に置かれた本棚に向かい、本を見始めた。

「何を探してるんだ？」

「いや、気分転換に何か面白い本はないかなと思ってな。」

そういい、本のタイトルをひとつずつ確かめ始めた。

俺とゴッツも一度今のことを忘れて、酒をてにとり、飲むことにした。

だがその瞬間、サファイアが驚いたような声をあげ、本棚から一冊の本を力強く取り出していた。

「おいおい、何を興奮しているんだ？」

「お前達、これを見る！」

サファイアは机に一冊の本をたたきつけた。

そこに書かれていたのは、神伝の地の章。中身をめくるとそこには新神伝地の章とは別のことが書かれていた。

旧神伝だ、目を丸くしてその本をゴッツが1ページ、また1ページを読み始めた。

「な、なんでこんなところに・・・。」

「ここは田舎町だ、恐らく教会が出版した神伝はこんなところにまではこなかったんだろう。」

・・・これは凄い、ソウルブリンガーについてのことがびっしりと書かれている。」

地の章は主に神とソウルブリンガーについて書かれていた。

かつて、ソウルブリンガーとは剣ではなく、何かの鍵であることが書かれていた。

何の鍵かまでは書かれていなかったが、それがあれば神に対抗するための何かも得られることがわかった。

長い歴史の中で、人々はソウルプリンガーは神を倒すための剣であると誤認していて、対神との戦いで使えば人でも神に勝てると思いをしている。なら、ソウルプリンガーの役割とは何か、そこだけは書物が古すぎて読むことができなかった。

地の章には他にも神という存在についてとあり方についても書かれていた。教会との関わりについては一切書かれていなかったが、神とは一体何か、そこについて触れられていた。神とは人間と違い、完成された力を持つ個体であり、また神には終焉が存在せず、さらには善と悪というものすら存在しない。つまり、人々が一般的に邪神として言われている神々は人がでっちあげた空想であることが書かれていた。かつて人々が戦った神は命を司る神、デストと呼ばれる男だ。

「つまり、神とは一体どういうことなんだ？」

「生まれ持つてから力を持つ個体のことだろう、俺達人間は訓練を積んで強くなる。だが、神は訓練しなくてもはじめから強い、そういうことだ。」

だが、デストが何に対して完成されているかまでは書かれていなかった。神はすべての万物にそれぞれ存在していることも触れられていた。剣がはじめて生まれた頃に、剣の神が。ガイア国が誕生した際にはガイアの神が、とどんな万物にも神が存在しているらしい。その中で、神々は人々が新しいものに命を吹き込むことにストップをかけた。それが、遙か大昔にあった大戦だ。

「しかし、神が増えることってそんなによくないことなのか？」

「それはわからない、この神伝は元々人が書いたものだ、神の考えなんてわかるはずがないさ。」

ゴツツはそういって、この神伝に書かれていることを一蹴した。  
俺は首をかしげながら、話の続きを聞いた。

しかし、不思議なものだ。神々と人々が争いをしたことが真実であるならば、ならこの剣は一体どこで、何のために作られたのか。  
そして、一体どこの誰が作ったのか。

## 地の章 1節

・・・物語を遡ること数十年前のことだ。  
すべての結末を知った上で語り部となるう。

俺か・・・、俺はゴツツ、すべてが終わり、すべての結末を綴る為に今俺は存在している。

今話そう、あの戦いが起きた根源を・・・。

俺たちは地の章を見つけてから一度ガイア国へと戻り、団長の家へと足を運んだ。

そこには長く、分厚く、古臭い日記がいくつか発見された。

書かれていた内容は・・・かつてガイアが西と東に分かれてた頃のことだ。

そして、悲しい、ひとつの小さな村で起きた襲撃事件。

これが全ての始まりだったことも示されていた。

-----

「・・・アラン！起きろアラン！」

ガイアの国の遙か果ての村で火柱がたつ。

どうも様子がおかしい、傭兵のアランは目を覚ます。

「どうしたアヴェン、血相をかいて・・・って何だこの熱気は！」

「ああ、どうやら敵襲らしいな。相手は誰かわからん、いくぞ！」

剣を手に取り、アヴェンとアランは外へと飛び出した。

アランの息子、アレクはその後姿を追いかけて、共に外へと飛び出した。

戦火は偏狭の村にも飛び移っていた。

当時、ガイア国では西と東で国が別れており、互いにいがみ合っていた。

原因は些細なことだ、巻き添えにされたアラン達にとってはいい話じゃなかった。

だが、戦わなければ生き残れない、そんな生活を強いられていた。

アヴェンはこの頃、傭兵騎士団随一の腕前で評価されており、近いうち村を立ち去る予定だった。

アランは息子を養うため、王都へと移り住む段取りまで来ていた。その矢先のこの襲撃だ。

相手はもちろん東ガイアの連中であると確信し、戦っていた。

「……どうも様子がおかしいな。」

「ああ、お前もそう思うかアラン。こいつら、どつちでもないぞ！」

見たことのないローブを纏った連中が村を襲撃する。

その中で、何人かは東ガイアの腕章をあたりへと撒き散らしていた。

これはどういうことか、はじめは二人は理解できなかった。

だが、戦うたびにその意味に気づき始めた。

「……なあ、アヴェン。これはどう考えても……東ガイアの仕業にするためのものだよな。」

「ああ、間違いないな。……クツ、こいつらは一体何者なんだ！」

「なあ、お前はここから逃げろ！……俺はここに残り、こいつらを食い止める。」

「アラン！お前まさか……。」

アヴェンは驚いた表情で体を止めた。

広がる炎の中、親友から出た言葉に絶句したからだ。

「いいな……ふたつにひとつだ！お前はこの真相を暴け、いい

な・・・。」

「・・・くっ！まかせてくれ、必ず・・・必ずこの事件の真相は明かしてみせる。」

燃え盛る村の中、襲い掛かる何者かを振り払いながら村を後にした。その後、追っては迫ってくるが決死の思いで王都へとたどり着き、アヴェンは生き延びた。

・・・いうまでもないが、この事件が起きてから数ヶ月後、村は悲惨な姿に変わり果てていた。

アヴェンはその絶望の光景を目の当たりにし、涙した。

-----

その数年後のことである。

アヴェン率いる傭兵騎士団サラマンダーは東ガイア国へと独断で突入。

戦いではなく、話し合いで事件の真相を話し合い、西ガイア国の王を差し置いて、傭兵団内での平和調停を結んだ。

その後、西ガイアの国王とは戦いを通して話し合いに持ち込み、同じくして東西合併の意思表示をさせることに成功。

だが、アヴェン自身が親友に託された謎についてはまだ解決しておらず、独断で調査を進めることを裏で行っていた。

この事件の全ては死んだ団長の家の書斎から発見され、俺たちが調査を引き継ぐことを地の章を見つけてから決断した。

・・・そう、この物語はたったひとつの村で起きた襲撃事件がはじまりだった。

俺たちはすべてが終えてからその真相を知り、驚愕した。

だが、団長はどういう思いでその数十年間を生きていたのか。

今となっては俺が知る由はなかった・・・。

## 地の章 2節（前書き）

+ マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

ソウルプリンガーと思われる剣を操る若者。

シオルダーアーマーを好み、フルアーマーは着ない。

+ ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

ローブで身を纏っているが、胸にはバックラーが仕込んである。

+ サファイア

ジュエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

なお両利きである。

## 地の章 2節

あれから数ヶ月のときが流れた。

サラマンダー騎士団の壊滅、こんな事件はとっくに過ぎ去り、とうとう世間から注目されることもなくなつた。

だが、俺たちはひとつのある事実に気づいた。

「・・・なあ、ひとつ気になることがあるんだ。」

サファイアが地の章と海の章を読んでいる中、ふとその言葉を漏らした。

彼が言うには、地の章と海の章で書かれている内容を見る限り、明らかに剣について触れられていることが改めて確認することができた。これはどういうことなのか、最初は言っている意味がわからなかった。ゴッツは団長の日記を閉じ、旧神伝へと手を伸ばす。

「たしかに、神を討ち取る手段について少しだけ触れられているよな。」

「それだけじゃないんだ、こいつを詳しく見てくれ。」

この書物によると、ソウルプリンガーは鍵である。これは以前からわかりきっている。だが、その鍵の使い方だ。ソウルプリンガーとは従来太陽の光を浴びることにより、何かへの道を標すことを可能とする鍵である。しかし、俺たちがそのやり方がわからず、今のように足止めをくらっている状況になっている。だが、その使い方についてはただ剣を掲げるだけであることが書かれている。彼はそれだけではなく、海の章の最後に描かれた挿絵についても触れた。神と戦うための切り札はソウルプリンガーである・・・もしかしたら、その前提がそもそも間違っていたんじゃないのか、サファイア

はそう指摘した。

「神を絶つ、怒りの刃は時として人の命をも断つ。」

「これはソウルブリンガーを表している一節であると俺は思っていたが……どうなんだ？」

「さっき話した挿絵だ、男と女が一本ずつ剣を持っているこの絵……どうもひっかかってな。」

彼は紙に様々な絵を書き並べ、俺たちへと差し伸べた。

そこには呪文の印から、また見たことのない文字もいくつか並んでいた。

サファイアはひとつずつ、丁寧に俺たちへ説明してくれた。

「……つまり、どういうことなんだ？」

俺は思わずそう呟いてしまった。

ゴツツはとなりで絶句していた、それほど壮絶な内容だったのかと俺は考えた。

「……お前が持っている剣、そいつはソウルブリンガーではないってことだ。」

その言葉に思わず呆気を取られてしまった。今まで窮地を救ってくれたこの切れ味のいい剣は、ソウルブリンガーではない……。なら、何故教会の人間はこの剣に血眼になっていたのか、まったく検討がつかないじゃないか……、俺はそう思った。

「思えば……思えば教会の連中はこの剣をどうしようとしていたか。」

「奴らはこの剣を”葬るために”欲しがっていた。」

「だが、オーウエンの奴はこれをソウルブリンガーとっていたはずだが……。」

俺たちの中ではまだ真実がつかみきれていない。だが、サファイアは何かを悟ったかのように話を続け始めた。長らく、この旧神伝については誰も触れていない可能性が高いことをまず前提で話した。新に置き換えるため、旧はほとんど回収され、恐らく焼き払われたという仮説をまず前提に彼は話す。そもそも、ソウルブリンガーとは鍵である。これは地の章でつい最近証明された内容である。だが、海の章では神を倒す剣の存在についても言及されていた。海の章の最後にはソウルブリンガーについて書かれていて、神殺しの剣はソウルブリンガーであると深く認知されてしまったのであろう、そういう仮説も彼は立てた。

「つまり、その剣は本当はソウルブリンガーではなく、神殺しの剣であるということか。」

「そういうことだ、だが教会の連中はソウルブリンガーが神殺しの剣であると勘違いをしている。」

「その考えからいくと、奴らはデストについてももしかしたら知らないのか。」

俺は横槍をつつくように言葉を発した。二人ははっとした顔で俺の方を見た。

「そうか！奴らは恐らく、鍵の存在すら知らないのか。」

「……それだと、どうしても矛盾が起きる。奴らは必ず神の存在を知っているはずなんだよ。」

ゴッツが改めてそう言った。奴らの目的は世界の混沌、それならば破壊神であるデストを召喚するのが手っ取り早いと説明した。新神

伝にも破壊神がいることは述べられているため、知らないでは済ませられる内容ではないのはたしかだ。

「ならば、その答えを俺が教えてやろうか？」

背後から背筋が凍るような殺気が際立つ。俺たちは思わず武器を手に取り、それぞれ散り散りに壁際へとよった。

ふと見ると、蒼い竜のような鎧と真紅のマント、フルメールだが、どこことなくスマートに見える鎧。

その豪華さはそれだけにとどまらず、胸にはエメラルドに輝く宝石が光を放っていた。

「な、何者だ！」

「そうだな、私は教会の代表の1人・・・アレクサンダーとでも名乗っておこうか。」

「アレク・・・サンダー？」

「ところで君たちは深く知りすぎた。まさかデストの存在にとどまらず、その剣の正体にすらたどり着くとはね。

これは教会内部でも3人しか知りえない事実だ。」

「なんだって・・・？」

「クツクツク、どうやらここで君たちは死ぬようだな。」

煌くような蒼いガンレットからは火花のような音が鳴り響く。その瞬間、凄まじいスピードでゴツツの胸に拳が炸裂した。

爆発するような豪快な音でゴツツが壁にめり込み、そのまま下へと落ちていった。

凄まじい爆音が鳴り止むと、次の瞬間には俺の方へとターゲットを切り替えていた。まずい、そう直感した俺は剣でその拳を受け止めた。

衝撃が体中を駆け巡る・・・、まるで高いところから飛び降りて着

地した時のような衝撃が足からジリジリと伝わる。  
これがまさに、重い一撃なんだろう、俺はそう悟った。

「しっかりしろ！ここは逃げろ、俺が食い止める！」

サファイアはそういつて両手から煙を噴出し、あたりの視界を悪くした。

その後、火球を壁に向けて放ち、穴をあける。俺にそこから逃げろと叫んだ。

俺はサファイアを置いて逃げるわけには、という気持ちで足をとめようとしていた。だが、状況は最悪。ゴッツも倒されてしまっている。ただ俺は・・・その場を走って逃げることに出来なかった。宿から飛び出した際、あたりは不気味な殺気がこつちを刺すように立ち込めていた。ゴッツが落下したと思われる痕はあったが、彼を探す余裕は俺にはなかった。ただ、ただ、俺はその村から飛び出し、必死に逃げた。

.....

「・・・クツクツクツ、奴らはまだソウルプリンガーは見つけていないようだな。」

地の章と海の章はどうやら消えた二人のどっちかが持っているみたいだ。

奴らは捕獲しそこねた・・・か、仕方あるまい。この私の拳を受け止めたからな。

もう一人のほうは致命傷のはずだが・・・さてはて。

ところで、そのゴミの処理はお前達に任せたぞ・・・ハッハッハッ  
！」

アレクサンダーはサファイアから拳を抜くと、地面へと叩きつけた。その蒼い鎧は、一瞬にして真紅に染まっていた。

### 地の章 3節（前書き）

+ マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

ソウルプリンガーと思われる剣を操る若者。

+ ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

アレクサンダーの襲撃で行方不明。

+ サファイア

ジュエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

アレクサンダーの襲撃で命を落とす。

+ アレクサンダー

教会の代表の1人で、実質最高司祭。

蒼い龍の鎧が特徴的で、拳を武器とする。

稲妻のような緑色の髪型で、瞳は茶色。

+ エメラルド

ジュエルカルテットのルビィの妹。

名前の通り、エメラルドの瞳とエメラルドのショートヘア。

風の魔法を得意とし、またマントで身を包んでいるが、長袖半ズボン。

姉と家を失い、マルスと共に旅に出る。

＋ランド

通称砂漠の勇者。

根っからの戦闘マニアだが、根はいい奴。

オレンジ色で、ヘッドギアを常に纏っており、胸当てだけをしている。

武器は何でも使えるらしく、その気になれば杖でも大丈夫らしい。

### 地の章 3節

教会の魔の手は様々なところで伸びていた。  
ウイズタムの街、黒魔術研究所。

ここもどうやら数週間前に襲撃されており、サファイアの師匠にあたる女性も命を落としていた。

そればかりか、ジュエルカルテット全員がアレクサンダーとの交戦で命を落としたらしい。

俺はその見るに耐えない建物の残骸をひとつひとつ拾い上げたが、不思議と怒りと悲しみは湧いてこなかった。

「・・・空しいぜ。」

俺は木の断片を握りつぶし、黒魔術研究所と書かれた看板を蹴り上げた。

すると背後から石が飛んできた。針に刺されたような痛みが俺の心を砕いた。その瞬間、あふれるような涙が流れる。

「やめて、ここは私の故郷なのよ！」

その一言で涙が一瞬でやんだ。か弱い声が俺をそうさせたのか。その時はわからなかった。

後ろにはひらひらとしたマントをつけた女の子がたっていた。いや、女の子というには大人っぽい。

「済まないな、君は？」

「私はエメラルド、ジュエルカルテットの生き残りよ。」

「・・・ちよつとまってくれ、ジュエルカルテットは全員死んだんじゃない・・・？」

俺は少し混乱していた。ジュエルカルテットはサファイア、ルビイ、ダイア、アクアマリンの4人で構成されているという話をサファイアからよく聞かされていた。だが、5人目が目の前にいる、俺にはこの意味がよくわからなかった。

「私はルビイ姉さんの妹で、いわば控えめみたいなものね。」

「なるほどな。」

「・・・で、あなたは一体何者なの？前にきた蒼い鎧の男のように悪意を感じないからまだ話せるけど・・・。」

「俺の名前はマルス、・・・がここに来てもどうやら意味がなかったらしい。」

俺はすべてのいきさつについて、彼女に説明した。

サファイアのこと、教会のこと、そして何故襲われたのか・・・と教会にとって、旧神伝を持っていた人間は処刑に等しい、それがすべてを物語っていた。

「・・・そんな。」

「そういうことだ。さて俺は仲間を探しに行くよ。」

「待って！私も連れて行って！」

「君がか？・・・仕方ない、ついてきても構わないが、君を守るつもりもそんな力もない。それだけは覚悟してくれ。」

「わかったわ。」

.....

エメラルドという女は、不思議な力を持っていた。

荒れ狂う荒野の中で獰猛なサンドワームに恐れることなく、風の刃

の魔法で次々と魔物を葬っていった。

俺が今まで苦心してきた相手にですら、あっさりとしとめていた。これが魔法の力とでもいうのか、と悔しい気分にはなった。

それでも女の子なのか、それとも魔導師なのか、体力は恐ろしいほどないのも特徴だった。

そんな俺は彼女を気遣いながら戦うことに少し限界を感じることをさえあつた、そろそろ引退時なのかも知れない。まだ若い、そう感じることをさえあつた。そんな中、最果ての街アルクウムへとたどり着いた。俺はここで1人の心当たりを宛てにやってきていた。

「・・・ふっ、手紙はきっちり読ませてもらったぜ。すべてが終われば、報酬はきっちりくれるんだろっな、マルス。」

「ああ、俺の覚悟と共に受け取ってくれ。こうして会いに来たんだ、信じてくれるよな、ライド。」

傭兵ライド、砂漠の勇者とも言われるトップクラスの戦士である。

傭兵の中では最も実力が高く、また戦闘狂でも知られている。その実力はもちろん傭兵の中でも三本指にも入っており、その肉体は弓すらはじくほど強靱で、さらに呪術ですら強靱な精神で跳ね返すほどの力の持ち主である。また、腕力自体も人並み外れており、大剣を斧ひとつでへし折ることすらたやすいと来ている。アレクサンダーとの戦いに備え、彼の力を借りることを俺は決意した、報酬はすべてが終われば決闘をするという内容だ。

「そして、今までにない強い相手とも戦えるんだよな？」

「ああ、間違いないぜ。拳ひとつで鎧を粉々にするような相手だ。」

「そいつは面白そうだな、俺はその後ろのねーちゃんも気になるけどな。」

こいつの”鼻”は人が纏うオーラのようなものですらかぎわける力

を持っている。それがどんな非力なものであっても、才能に気付くらしい。一体どんな感性があるのか、俺にはまったく想像できない領域だ。

「ねえマルス、あの人・・・なんなの？」

「あれが砂漠の勇者だ、実力と名実はトップクラスだし、おかしなところはあるが根はいい奴なんだ。」

そう、二人を失った今、俺がやるべきことはこの新しい仲間と共に教会と戦っていく必要性がある。

そのためには、力と、そして新しい道が必要となる。

俺はこの二つの書物と、サファイアが残したヒントを元にライトブリンガーを探しに次の地へと向かう。

## 地の章 4節(前書き)

+ マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

ソウルプリンガーと思われる剣を操る若者。

+ ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

アレクサンダーの襲撃で行方不明。

+ サファイア

ジエエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

アレクサンダーの襲撃で命を落とす。

+ アレクサンダー

教会の代表の1人で、実質最高司祭。

蒼い龍の鎧が特徴的で、拳を武器とする。

稲妻のような緑色の髪型で、瞳は茶色。

+ エメラルド

ジエエルカルテットのルビィの妹。

名前の通り、エメラルドの瞳とエメラルドのショートヘア。

風の魔法を得意とし、またマントで身を包んでいるが、長袖半ズボン。

姉と家を失い、マルスと共に旅に出る。

＋ランド

通称砂漠の勇者。

根っからの戦闘マニアだが、根はいい奴。

オレンジ色で、ヘッドギアを常に纏っており、胸当てだけをしている。

武器は何でも使えるらしく、その気になれば杖でも大丈夫らしい。

## 地の章 4節

ガイア国、”教会”

すべての根源はここにあり、すべての黒幕だ。そして、俺たちの最後の目的の地でもある……。

俺はこの神を倒すための剣を手に、二人の仲間を引き連れてこの教会へと直接殴りこみへと向かった。

だが、そこでは意外な展開が待ち受けていた。

「ようこそ……君がマルス君だね。」

「あんたは刺客か……。」

目の前にいる司祭は武器を出すことなく、ニコニコとした顔で俺を見つめる。二人は目を丸くしてその光景を見ていた。ふと思うと、隊長の家へ向かった時は教会の連中は襲撃してこなかったことに不思議がったことがあったが、この光景もまた不思議なものがあった。

「私は教会の最高顧問である、ライラックです。さあ、入りなさい。」

.....

広々とした空間に、周りは水の空間で包まれていた。優しい雰囲気というのか、中央にある女神像は神々しく見えるほどだ。

窓の風景からは天の塔が聳え立っているのが見え、その反対側にはガイア城がかすかに見える。

二人は紅茶を飲みながら、その風景を眺めていた。俺は緊張に包み

込まれ、不安に感じていた。  
なんだろうか、このもどかしい気持ちは。

「安心しなさい、私は少なくともあなたの味方です。」

「どうということだ？」

「ここは中立都市ゴッドリム、この先は神聖な神殿となっています。さて本題に入りましょう、今教会はあなた方とは無関係なところでも危険な状況に陥っています。」

「危険？どうということだい？」

「まず、教会はあなた方の知っている通り、国の裏で暗躍している組織です。」

しかし、その組織のみなが悪いものではないことを知ってください。我々は少なからずあなた方のサポートを影で行ってきました。」

「サポート・・・？」

「そこはまたいずれ・・・。さて、あなたはアレクサンダーに会いましたね？」

「ああ、会ったぜ。あいつは俺が必ず・・・！」

「彼は今、教会の代表の座を力で奪い、今教会の8割の人間はアレクサンダー派へと寝返りました。」

昔から教会は私とゲルニックと呼ばれる司祭の派閥で分かれておりました。その昔、彼は特殊な力を持つ人間の撲滅を図り、その力を持つ戦士を次々と葬っていきました。しかし、最近教会に加わった司祭の1人はゲルニックを討ち取り、その派閥をのとりました。」

「また凄く話だな。」

「彼の内乱によって私の派閥は大きなものになり、教会の解散の道をようやく開ける、そう考えていました。」

その言葉を聴き、俺は少し汗がにじみ出た。それもそのはず、教会は俺たちのすべてを狂わせた団体、そんなことが信じられなかったからだ。静かに固唾を飲み込み、話を聞く。

「質問なんだが、なんで解散しようと思ったんだ？」  
「ゲルニツクは恐ろしい男です。命を司る神デストの復活を企んでいました。しかし、その儀式は成功したか失敗したか、私には結果はわかりません。だが、彼が儀式を行ってからは教会全体に恐ろしいほどの悪意が立ち込め始めました。その悪意の代表が今のアレクサンダーです。」

ライラックが言うには、教会のそもそもの目的は世界のバランスを正義と悪を五分五分に保つための組織で、正義を強く主張するものはゲルニツクが、悪を強く主張するものはライラックが処理するという名目で分かれていたらしい。だが、ゲルニツクは突如命を司る神デストの復活を目論み始め、全ての神伝を回収し、焼き払い、そこから派閥争いがはじまったとのことだ。この戦いはもう30年近く続いており、奴は長らくの間特別な力を持つと呼ばれる人々が住む村を片っ端から潰していつていたらしい。だが、近年になって現れたアレクサンダーにその座を追いやられ、命を落とした。そこからは力による制裁を主とする教会が出来上がった。

「奴らはもうここを拠点にはしていない、そういうことだな？」  
「そうですね、．．．よろしければ私たちも戦いに混ぜてはいただけないだろうか。」  
「どういうことだ？」  
「デストが復活する前に、私達は彼らを倒さなければならない宿命にいます。」

．．．彼らは今、虚空の塔へいます。」  
「虚空の塔だと!？」  
「はい、そして私達はそこへ向かう橋の場所も知ってます。どうですか、一緒に行きませんか？」

「．．．どうやら、最終決戦はそう遠くはないみたいだな。」

いいだろう、俺はその提案に乗るつもりじゃないか！」

俺は、サファイア、団長やゴッツ達のためにも奴らと戦う。  
これが俺ができる、最後の仕事だ。

## 地の章 5節（前書き）

+ マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

ソウルプリンガーと思われる剣を操る若者。

+ ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

アレクサンダーの襲撃で行方不明。

+ サファイア

ジュエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

アレクサンダーの襲撃で命を落とす。

+ アレクサンダー

教会の代表の1人で、実質最高司祭。

蒼い龍の鎧が特徴的で、拳を武器とする。

稲妻のような緑色の髪型で、瞳は茶色。

+ エメラルド

ジュエルカルテットのルビィの妹。

名前の通り、エメラルドの瞳とエメラルドのショートヘア。

風の魔法を得意とし、またマントで身を包んでいるが、長袖半ズボン。

姉と家を失い、マルスと共に旅に出る。

+ランド

通称砂漠の勇者。

根っからの戦闘マニアだが、根はいい奴。

オレンジ色で、ヘッドギアを常に纏っており、胸当てだけをしている。

武器は何でも使えるらしく、その気になれば杖でも大丈夫らしい。

+ライラック

教会所属の司祭、テンブルナイトの称号を持つ。

司祭服を身にまといまわっているが、その下は教会で出回っている鎧に包まれている。

ヒゲと緑の瞳が特徴。

## 地の章 5節

「だあああああ！」

俺は一心不乱に剣を振り回しながら塔を駆け上っていく。

まわりには大勢の味方が支援してくれている、これほど頼りになることはない。

その後続からライラック、エメラルド、ランドが続いてついてきていた。

虚空の塔、ここが最終決戦の地だ・・・俺はすべての決着をつけるためにここへとやってきた。

迫り来る教会の戦士達は刃をこちらへ向けていたが、どうやら階段での戦いに不慣れなのか、動きが悪い。

元々傭兵出の俺とランドにとってこういう状況での戦闘はむしろ専門分野に近いものがあった。

「はっはっはっ！俺達は場数を踏んでるんだぜ、こんな足場の悪いところじゃ、お前達は満足に動けんだろう！」

そういいながらランドの奴、投げナイフでひとりずつ潰していった。こいつはやはり違うな、俺はそう思いながら。先へ、先へと進む。

元々魔法を専門とするエメラルドにとってこの足場の悪い状況での戦闘は苦になることはなく、むしろ動きの悪い教会の戦士達にとって彼女は天敵に近い。その反面、こういった戦いに慣れていないライラックは見ているだけで危なっかしかった。

「はあはあ・・・私に気にせず、君たちは上へ向かいなさい！」

そうは言うが、さすがに見捨てることも置いていくこともできない。三人で彼を支えながら上へと目指していった。そして、虚空の塔の最上階へとようやくたどり着いた。そこには蒼い鎧の男が1人佇んでいた。

「・・・来たか、わざわざ殺されにきたか。」

男は不敵な笑いを見せながらこっちへと振り返った。こいつは、サファイアとゴツツを殺した男。手に汗がにじみ出る。唇を強くかみ締め、血がにじみ出る。だが、あまりに緊張感からかどうもランドの様子がおかしい。どうやらかなりの敵であることを長年のカンが察知しているみたいだ。俺も冷静になると、不気味な汗が額からにじみ出ていたことに気付く。エメラルドはそういう緊張感はまったくないみたいだ。ライラックは不思議と落ち着いている。

「・・・アレクサンダー、お前は一体何を企んでいる？デストの復活・・・それはゲルニックも求めていたことのはず。わざわざのとった理由が私には見えてきません。」

「お前は・・・ライラックか。話すことは何もない、この私の拳で死ぬがいい！」

狂気の拳が襲い掛かってきた。はじめに狙われたのは、ライラックだ。テンプルナイトの称号を持つ男の力はここまでは何も見えてこなかったが、一体どんな戦いをするのか。この緊張感の中、俺は興味があった。ライラックは身にまとっている司祭服を脱ぎ捨て、古びた剣を抜けとり、その拳を受け流した。それと同時に左手からかすかな光を放ってアレクサンダーの左肩へとあてる。すると、奴の肩の部分が粉々に砕けた。

「むう！これが教会随一のテンプルナイトの実力か！こしゃく！」

奴は一步下がり、態勢を整えようとする。だが、その後ろからランドが斧を振り下ろす。そう、この戦いは4対1、状況は明らかにこちらが有利のはず。俺とエメラルドもそれに続いて攻撃を畳み掛ける。勝負は一瞬、こいつを倒し、すべてを終わらせる。

「うおおおおお！」

俺は神殺しの剣を振り下ろし、アレクサンダーの頬を掠めさせた。そこからは血がにじみ出ていたが奴は怯むことなく攻撃を仕掛けてくる。危険を察知し、バックラーでガードするが、盾は一撃で粉々に碎け散った。なんて破壊力だ！俺はその威力に怯んでしまった。その瞬間、塔全体が揺れるような衝撃が走った。

「俺にこの技を出させた奴は・・・お前達が初めてだ。なかなかやるじゃないか。」

地面に拳をたたきつけると、ドーム状のエネルギー波が走る。その直後、爆風が俺たちに襲いかかった。エメラルドはその衝撃で吹き飛ばされ、ぴくりとも動かない。わずかに息づかいは聞こえる、気絶したようだ。ランドはその爆風を堪えきるが、鎧が溶け、しかもかなりのダメージを追ったらしい。立って入るが、ぴくりとも動かない。俺は反射的に剣でガードしていたため、ダメージ自体は負ったが、二人ほどのダメージは負っていない。まだ戦える、そう奮い立たせながら震える足に喝を入れた。ライラックは、倒れている。

「・・・ライラック？」

にわかには信じがたいが、ライラックからは息遣いがまったく聞こえてこない。ぴくりとも動かない。だが、鼓動だけはかすかに聞こえ

るのはたしかだ。

「どうやら、老いぼれはもう死ぬようだな。この技で即死しないあたりは、さすがはテンブルナイトといったところか。」

アレクサンダーはそういいながら、死に掛けているライラックを蹴り上げ、吹き飛ばした。それでもライラックはピクリともしない。俺はその瞬間、不思議と怒りが込みあがると同時に、かえって冷静になってしまった。そして、気付けば剣を奴の胴へと深々と切り刻んでいた。今までにない、鮮やかな動きで強烈な一撃が決まっていた。奴は雄たけびを上げる。しかし、鎧を切り裂き、少し腹に傷をつけた程度のもにすぎないが、それにしても大げさすぎる。あきらかに様子がおかしい。

「き、貴様……そ、その剣……ま、間違いない……。太陽剣クラウソラス……。ま、またしてもそ、その剣にお、俺は……うぬおおおお！」

頭を抱えながら、アレクサンダーはばたりと倒れた。俺には何が起こったかわからなかったが、ふと我に返るとライラックの下へと走った。彼は意識自体はあるようだが、目の焦点がどこかおかしかった。体はピクリともしない、何かを小言で言っているのはわかる。

「こ……こいつ……こいつを持って行け……。」

ライラックから剣を渡された。大昔の剣のようにも思えるほど、くたびれている剣だ。

「ソ、ソウルブリンガー……こ、こいつはデスト復活の時に……必要……鍵……鍵だ……。」

「な、なんだって!？」

「い、いいか・・・デストの復活は目前・・・まで・・・来てる・・・はずだ・・・。」

か、必ず・・・奴を・・・。」

震える声はここで止まってしまった。俺はその剣を手にとり、空を見上げた。デストの復活、それほどにまで恐ろしいものなのかと。ランドがよるめきながらこちらへと歩いてきた。ダメージは深いみたいだが、なんとか動いているみたいだ。

「・・・奴は・・・奴は倒したのか？」

「いや、よくわからないんだ。こいつでダメージを与えると、叫びだしてね。それよりも、エメラルドが心配だ。」

「大丈夫だ、彼女は気絶しているだけだ。それより、ライラックは・・・。」

「ダメだ、さつき死んでしまったよ。・・・それより、とどめを刺さないと。」

俺は剣を握り締め、アレクサンダーの方へと歩みかけた。俺の持つ剣は眩い光を不気味に放っている。その刃をふと見ると、体調、サファイア、ゴッツ、オーウェンと今まで出会った人々の顔が映し出されている気がした。だが、近づこうとした瞬間、アレクサンダーが目を覚まし、立ち上がった。俺は焦り、剣を構えた。だが、どこか様子がおかしかった。

「・・・くっ。こ、ここはどこだ!・・・お前は一体何者だ。」

「・・・なに？」

「俺は一体・・・、なああんた、ここは一体どこなんだ？」

様子がおかしい、今まで殺気と悪意に満ちていたアレクサンダーで

はない。そんな気がした。ランドも突然の出来事に呆気を取られていた。これはあいつの演技なのか、そうじゃないのか、まったく検討がつかない。

「お前は何者なんだ？」

俺はわかりきったことを聞いてしまった。だが、そう発言するほかなかったのだ。

「俺はアレク、フリーの傭兵だ。し、しかし・・・長い間悪い夢を見ていた気がする。」

「どういうことだ？」

「わ、わからない・・・。俺は虚空の塔へ調査の依頼を受けてからその先の記憶がまったくないんだ。

今まで何をしてきたのか・・・。」

「ちょっとまってくれ、じゃあ今までお前が何をしてきたか、まったく覚えていないと言っつのか！」

俺は違う怒りが心の中で込みあがっていた。サファイアやゴッツを殺したのは、こいつの意識の外で起きた出来事だというのか、ただそれだけが頭の中でぐるぐると回っていた。そんな中、後ろからさつきまでこいつから感じられていた悪意と殺気が感じられた。ふと、後ろを振り向くと司祭のような男が1人立っていた。

「・・・クツクツクツ、アレクサンダー・・・今までご苦労だったな。」

「アレクサンダー・・・？俺のことか、なんだお前は！」

「私は・・・デスト、命を司る神とでも言っておくか。」

司祭服の下からは筋肉が隆々としている肉体がちらついている。肌

はどことなく薄っすらと黒く見える。赤いロングの髪、そして右手には見たことがない盾のようなとげとげとした何かがあった。雰囲気は凄く神々しく、また不気味な印象を受けた。俺もそうだが、ランドも大量の汗を噴出していた。

「クラウソラスを持つ男・・・お前は運がいいな。私はお前のせいで少し休まなければならぬ。しばし、休憩をとりたいと考えている。本当ならば、今ここで殺してやってもいいが・・・今日は引き下がるでしょう。」

「ま、待て！お、お前はいい、いつ復活したというのだ！」

「ゲルニックと言ったな・・・あいつが私を復活させた。ただ私を利用しようとしたあいつはそのアレクという男の強靱な精神と力を支配し、始末した。私の望みは地上に蔓延る人間の排除なので・・・」

「どういうことだ？」

「今から数百年前、アルベインと呼ばれる男がそのクラウソラスを片手に我々神の侵略を阻止してきた男がいた。私はそいつに地上で悪意が満ち足りるようであれば、再び大地に生きる人間をすべて排除すると、約束したのだ。奴は人間には未来がある、素晴らしい私を倒して見せた。だが、奴の思惑とは別に地上はまた自らの欲のために、世界が再び悪意に満ちるそんな世界が生まれてしまった・・・クッククック、果たしてお前はアルベインのように私を止められるかな？」

「・・・クツ！」

「さて、私はここで失礼させてもらうよ。ダラン！ゲルティ！地上にいる人間達を排除するためにお前達も復活するのだ！この私が完全な肉体を取り戻した中、お前達も目覚めることができるはずだ！・・・クッククツ、一カ月後にはこの大地に生きる人間はみな死ぬ。それまでわずかの人生を楽しむがいい・・・ハッハッハッ！」

デストはそう言い残し、その場から去っていった。ただむなしさだけが塔の上では残っていた。なんてこった、そんな言葉がランドの口から漏れていた。アレクも呆気をとられてような顔をしていた。

「・・・一ヶ月か、まだ時間はある。天の章を探し出し、あいつらを数百年前と同じく倒すしかないな。」

「そうだな・・・それよりマルス、あいつはどうする？」

「一緒に連れて帰ろう、詳しい話を聞く必要がある。」

.....

塔を降りて、近くの村の宿屋で俺達は休息をとることにした。エメラルドは相変わらず気を失ったままだ。アレクの話によると、虚空の塔で何かが起こり、その先の記憶がまったくないということらしい。長い間、復活したデストに精神を支配され、奴の完全復活の片棒を担いでいたらしい。神々の目的は悪意に満ちた大地の”浄化”が目的ということもわかった。だが、何故浄化しようとしているのか、ここまでは知ることはできなかったが、俺達は残りの一ヶ月で奴らを倒すための準備を整えることにした。

「・・・とりあえず、国立図書館へ行こう。ソウルブリンガーはここにあり、こいつは必ず奴らと戦うために必要だ、とゴッツは今まで話していた。そしてサファイアの話によると、この剣は鍵である。今やつらが休息している場所は少なくともそういう場所にあるんだろうな。」

「となると、狙うのは残りの神が完全復活する前に叩きに行くのが一番よさそうか。」

酒を飲みながら、ランドがそう言った。そう、完全復活してしまう

ともしかしたら勝てないかもしれない、それならば完全復活を遂げる前に倒しに行く、それが一番確実なんだろう。そんな中、今まで無言で話を聞いていたアレクがようやく口を開き始めた。

「お、俺も連れて行ってくれ！俺が奴らの復活の片棒を担いだなら、俺は俺なりに責任をとりたい。」

「大丈夫なのか？俺はまた支配されるんじゃないかと不安なんだが。」

「……いやランド、連れて行こう。責任を感じているんだろうし。アレク、もしかしたらこの戦いで命を落とすことになるかもしれない、それでもいいなら力を貸してくれ。」

「ああ……俺の力はきつと役に立つ。よろしく頼む……！」

アレクは深々と頭を下げた。ランドは不服そうな顔をしていたが、仕方ないと呟き、納得してくれた。

本当の最終決戦はここからだ、そして、すべての決着をつけるため、俺は剣を振るう……そう決心した。

## 海の章 1節(前書き)

+マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

神を倒すのことでできる剣、クラウソラスの使い手。

黒い甲冑を上半身だけ纏っていて、右肩にはサラマンダーの紋章が刻まれている。

+ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

アレクサンダーの襲撃で行方不明。

+サファイア

ジュエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

アレクサンダーの襲撃で命を落とす。

+アレク

デストに操られていたフリーの傭兵。

稲妻のような緑色の髪型。瞳の色は右目は青で、左目は赤。

正気に戻ってから見た目が少し変化している。

プレートメイルと紅いマントが特徴。

仲間にはなかったが、別行動をとっている。

+ エメラルド

ジエエルカルテットのルビィの妹。

名前の通り、エメラルドの瞳とエメラルドのショートヘア。  
風の魔法を得意とし、魔導師の法衣で身を包んでいる。

+ ランド

通称砂漠の勇者。

根っからの戦闘マニアだが、根はいい奴。

オレンジ色で、ヘッドギアを常に纏っており、胸当てだけをしている。

武器は何でも使えるらしく、その気になれば杖でも大丈夫らしい。

+ デスト

命を司る神、すべての黒幕。

赤いロングヘアで、司祭服を纏っていて、筋肉質。  
右手にはトゲトゲのシールドを装備している。

+ ダランとゲルティ

神々の一員、何を司っているかは不明。

## 海の章 1節

俺達はすべての決着をつけるため、神を倒すための準備を整えることにした。

装備の一新、そして新しい仲間探し。

神と戦うには、それに対抗するべく力が必ず必要になる。

そんな中、とある御伽話を思い出した。

「・・・フェザード？」

「ああ、ガイア国には死の山と呼ばれる山脈地帯があつてね。その中央には伝説の村フェザードつてのがあつたよ。

そこには妙技を操る剣士の一族があつて聞いた事があるんだ。」

「へえー、そんなのがあるんだあ。でもそれがどうかしたの？」

「ガイア国の御伽話で1人の戦士が愛する女の人のために神と戦うというものがあつてね。その戦士の出身がフェザードなんだよ。今情報がない中ではこういう情報もバカにできないんじゃないかなつてね。」

フェザード、正確には霊騎士の村フェザードと呼ぶらしい。この御伽話をすべて真に受けるわけじゃないが、実際この村が存在している可能性自体はサラマンダー傭兵団にいる頃に一度噂になったことがあつた。あの山へ登ると生きて変えることが出来ない、それがこの世界では常識的な話だ。だが、その山へ向かった調査団の1人が鳩伝書で一度連絡をよこし、村が存在したことの旨が書かれていた。そのため、今では村の信憑性は高いとされている。ただし、本当に妙技があるかは一切問われていないが。

「よし、その山へ行こう。時間もあんまりない、何もしないよりはマシだ。」

死の山、薄暗く、また道も険しいことで知られている。コンパスと  
いった方向を示す道具の類は一切使えないことでも知られており、  
特殊な磁場が場を乱しており、登るものの精神にさえ影響を与える  
とまで言われていた。この山に存在している魔物は主に獣であった  
り、スケルトンと言った死霊であることが多い。以前にアース神殿  
で戦ったゾンビ達と同種ではあるが、こういった魔物と戦うのは実  
際かなりきついものがある。

「死霊ばかりだと、この先不安になるな。キャンプできるかどうか・

。。。」

「ああ、弱いがこいつらは復活してくるからな。その分性質が悪い  
ぜ。」

この山に登ると最後、それは死霊の多さが物語っているのだろうか。  
先へ、先へと進んでいくとどうしても疲れだけが累積していく。そ  
の中で生きて帰れるのだろうか、その不安が付きまとう。

「こ、これが精神をも崩すと言われる死の山の所以か。。。」

「エメラルド、大丈夫か？」

「え、ええ。。。」

さすがに彼女も相当参っているらしい。それもそのはず、この山に  
入って数時間経過したが、まだ昼間にも関わらず、あたりはまるで  
夕方のような暗さである。不気味なだけならまだしも、実際ここま  
で死霊に溢れている。

「生きた心地がしないな、夜まであと7時間近くはあるってのに・  
・。」

「この疲れは精神的なものなんだろうな、もう人踏ん張りだ、行こう。」

俺はさすがは砂漠の勇者、と実感した。砂漠の中で何十日も生活できるだけの精神力の持ち主なだけあって、この状況であっても疲れをまったく見せることがない。それどころか、意気揚々と戦っている。これが歴戦の戦士の実力なんだろうか。魔物との場数を踏んでいるランドに少し感心してしまった。

それからしばらく時間が立つてから、薄暗い森がさらに薄暗くなってきていた。ランドは足を止め、4つの杭と火打石を出すと、焚き火を作る。

「今日はここでキャンプだ。3人の少人数の場合だ、俺とマルスで1時間交代で見張りだ。」

ランドの手際はかなりよく、今日は無事に夜を過ごすことができた。  
・・・何回も魔物の襲撃にあつはめになったが。

朝になると、再びフェザードを目指して出発する。道らしい道はここらへんからなくなっていたため、進めるだけ進むことにした。

一日ゆっくり休めた影響もあるのか、それともこの状況になれたのか、エメラルドの表情は昨日より明るかった。

「・・・しっかし、ここまで死霊だらけだと逆に嫌になってくるなあ。」

「数は言うほどいないんだろうな、恐らく復活している死霊などもあるだろうし。」

山に入ってから、3日目のことである。さすがのランドも疲れを見せていたが、ようやく、目の前には明かりらしい明かりが見えてきた。

「あ、あれは・・・村だ！」

ようやく辿り着いた、伝説と言われたあのフェザード・・・。嬉しさのあまり、つい涙を流してしまった。エメラルドもほっとした顔で腰を落とした。

すると村から1人の青年がこっちへと歩みかけてきた。

「君たち・・・まさかあの山を登ってきたのかい？」

「あ、ああ・・・。かなりつらかったけどね。」

「何十年ぶりだろうか、自力で山を登ってきた人って。」

「霊技もなしで登りきるなんて、相当な腕がないとできないのに。」

「さあ、疲れただろう。村でおもてなしするよ。」

彼の名前はアルガスといい、この村で修行中の身らしい。この村では代々伝わる妙技が存在しており、ここは御伽話と同じであることはよく理解できた。だが、気になっているのは神を倒すことができたその妙技の効果だ。

「下界ではそんな御伽話があるのか、面白いなそれは。なあ村長、この村は一応伝説化されてるみたいだぜ。」

「はっはっはっ、それはそれは。下界の者、もっと詳しく話を聞かせてくれまいか？」

「是非ゆっくりお話したいのですが、もうあまり時間がないのでこ

こちらの質問に答えてもらえませんか？」

「・・・霊技のことだね、こいつは魂を断つための剣技だね。死霊の魂を断つために開発された一族の秘術なんだよね。」

「しかし、そなたらは何故そこまで急いでいる？」

「・・・信じてもらえるかわかりませんが、デストと呼ばれる邪悪な神が地上を破壊しようとしているからです。」

「デ、デストだと！」

村長は顔色を変えて、とびはねた。その名前には心当たりがあるようだ、その様子だと。

「・・・数百年前、一族の戦士にアルベインと呼ばれる男がいた。

この男はかつてこの村を出て、その神を倒した。」

「アルベイン・・・どこかで聞いたような。」

「まさか生きていたとはな・・・魂を断つ霊技ですら叶わなかったというのか。」

「あるいは魂にダメージを与えるまでにしか至らなかった、ということか？」

「もちろんあり得る、神ほどになると霊技では断ち切れなかったのかもしれないな。」

そのためこの村の宝具クラウソラスを託したのだがな・・・。「この剣ですか？」

マルスはふと剣を出した。再び村長は驚きを見せた。

「・・・つくづくお主は私を驚かせる・・・いいだろう、アルガス、この人たちと共に下界へ行き、デストと戦ってきなさい。霊技は必ず必要になるようです。」

「はい、村長。そのつもりで身支度は済ませておきましたよ。」

「マルス殿、この男はこの村でも随一の霊技の使い手、足手まとい

にはなりません。是非役に立ててください。」

「ありがとうございます！・・・アルガス、よろしく頼むよ。」

新しい仲間が増えた。アルガス、そして霊技・・・この戦いに必要なパズルのピースは着実に増えている。決戦の日までの時間はあまり残されていない、このまま奴を倒すための準備を俺はする。

## 海の章 2節（前書き）

+ マルス

元サラマンダー騎士団の団員。

緋色の瞳で赤いショートヘアで寝癖が目立つ。

神を倒すのことでできる剣、クラウソラスの使い手。

黒い甲冑を上半身だけ纏っていて、右肩にはサラマンダーの紋章が刻まれている。

+ ゴッツ

元サラマンダー騎士団の団員。

アース国出身で、傭兵でありながら博識。

独特な青で染められたショートヘアで、瞳は紫色。

アレクサンダーの襲撃で行方不明。

+ サファイア

ジュエルカルテットの末弟。

本名は不明だが、髪と瞳はサファイアと同じ色合い。

ショートヘアと、短いマントが特徴的。

アレクサンダーの襲撃で命を落とす。

+ アレク

デストに操られていたフリーの傭兵。

稲妻のような緑色の髪型。瞳の色は右目は青で、左目は赤。

正気に戻ってから見た目が少し変化している。

プレートメイルと紅いマントが特徴。

仲間にはなつたが、別行動をとっている。

+ エメラルド

ジエエルカルテットのルビイの妹。

名前の通り、エメラルドの瞳とエメラルドのショートヘア。  
風の魔法を得意とし、魔導師の法衣で身を包んでいる。

+ ランド

通称砂漠の勇者。

根っからの戦闘マニアだが、根はいい奴。  
オレンジ色で、ヘッドギアを常に纏っており、胸当てだけをしている。

武器は何でも使えるらしく、その気になれば杖でも大丈夫らしい。

+ アルガス

霊技の使い手、ゴーストナイトの称号を持つ男。  
薄紫のロングヘアで、黒装束を纏っている。  
見た目とは裏腹に結構な熱血漢である。

+ デスト

命を司る神、すべての黒幕。  
赤いロングヘアで、司祭服を纏っていて、筋肉質。  
右手にはトゲトゲのシールドを装備している。

+ ダランとゲルティ

神々の一員、何を司っているかは不明。

## 海の章 2節

俺は・・・長い間眠っている中で取り返しをつかないことをしていたのかもしれない。

目を覚ますと、そこにあつたのはよくわからない状況。見慣れない連中。そして、見慣れない鎧を着た俺がいた。

山奥の滝つぼで打たれながら俺は今までの俺について考えていた。そして、これからは神と戦う。冷静に考えれば普通じゃない、そういう展開は。

「・・・かえって冷静になるんだろつな。こういう時だからこそ。」

今俺は偉大な父、アランのことを思い出していた。父は恐らく何者かに村を襲われた際に命を落としたのだろつ。だが、生きていた。父は偉大な生き方をしていたに違いない、俺はそう考えてきた。だが、それ以外の父は俺はなにひとつ理解できていなかった気がする。偉大なのは知っていたが、それ以外は一体何があつたのだろつか。そんな思考が俺の精神力の弱さを露呈していたのかもしれない。

「俺は一体何人の命をこの手で葬っているんだろつな。」

マルス達の話によると、俺は剣や斧の類ではなく、拳ひとつで人を殺めるほどの力を持っていたらしい。だが、実際岩に向かって拳を突きつけても、岩が砕ける様子はない。神の力も恐らく付加されていたのだろつか。ひとつひとつ不安と戦いながら俺は滝に打たれる。

「神と戦うことは、一体どういうことを意味しているのか。」

「神は何故、人々を滅ぼそうとするのか。」

「神の審判という奴か？」

「俺は何故利用された？」

「そして今の俺は一体何ができる？」

自問自答と俺は戦う。それが彼らと別れて、俺が選んだ道だ。静かに瞼を閉じ、俺は精神の世界へと入る。そして、そこで俺自身の闇と戦うのだ。俺がやらなければならぬのは神の力に屈しないための精神力をこの身に見につけること、そして何より今もてる力を覚醒させること。そうしなければ俺はただの足手まといにすぎない。

・精神の世界で俺と戦うこと、これが何よりの修行になる。

「神と戦うことは、一体どういうことを意味しているのか。」

「そいつは、ある種の人類の挑戦なんじゃないだろうか。」

「神は何故、人々を滅ぼそうとするのか。」

「審判、そういう類のものじゃないのか？」

「神の審判という奴か？」

「そう、そうに違いない。」

「俺は何故利用された？」

「心の弱さ、肉体の強さ。つけいるには格好の人物だったんだろう。」

「そして今の俺は一体何ができる？」

「何もできない、惨めは惨めなりにいきっていくのがお似合いだ。」

・・・俺の分身体はひとつひとつの疑問に対し、答えを投げかけてくる。この自分自身との闇と戦う際にやってはいけないのは、必ず認めてはいけないという点である。この闇は自らの心に潜む闇が全面的に押し出されている。そのため、こいつを認めてしまった場合、

その時点で光は敗れてしまう。だからこそ、この修行は簡単じゃないんだろ？俺はそう感じた。闇が答えた内容に、俺はひとつひとつの疑問を投げかけ、反論する。心の勝負、折れたほうが負けになる。

「忘れてはいけない、お前にとって父親とはなんだったのだ。」

「父親とは……？」

「そうだ、偉大だったのか？それとも優しい父親だったのか？」

「父は偉大……そして……優しい……？」

「本当にそうなのか？本当に偉大で、本当に優しい、そんな父親だったのか？」

「母は……母は父に見守られることなく死んでしまった。」

「そうだろ？なら、お前の父親は一体なんだったのか……。」

「……いや、それならお前に聞こう、俺の父はお前の父でもある。なら、お前にとっての父とは一体なんだったのが。」

「国のために戦う……いわば犬のようなものだ。家のことなんて省みなかった。」

「本当にそうか？」

「ならもう一度問おう、お前の父親はなんだったのだ。」

「俺にとっての父親・・・それは・・・！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0212y/>

---

黎明の騎士団

2011年12月10日02時54分発行